

## ランチョンセミナー(2)

### 2. ABPC の IL-12 産生、NK 活性および HIV 感染者に対する効果について

伊藤 正彦

山梨大学大学院医学部微生物学講座 教授

インターロイキン 12 (IL-12)は主にマクロファージから産生されるサイトカインの一種で、腫瘍細胞やウイルス感染細胞に対して傷害作用のある Natural killer (NK) 細胞や細胞性免疫リンパ球などの活性を司る生体内物質である。

一方、ABPC を経口摂取することにより、動物実験においては抗腫瘍効果や NK 活性の上昇、ヒトにおいては NK 活性の上昇が認められている。したがって我々は ABPC が IL-12 産生を増強することにより、これらの効果を発現しているのではないかと考え実験を行った。その結果、動物に ABPC を経口摂取させることにより、その動物のマクロファージにおいて IL-12 産生が上昇することがみられた。

一方、現在世界で4千万人がエイズウイルス (HIV) に感染しており、社会的な問題となっている。HIV 感染者においては免疫を高める CD4(+) T リンパ球に HIV が感染して CD4(+) T リンパ球を破壊し、その数が次第に低下する。その結果 HIV 感染者は免疫能が徐々に低下し、身の回りに多数常在する細菌やウイルスに感染しやすくなり最後はこれらによる感染（日和見感染）や腫瘍の発現により死亡する。

我々が HIV 感染者の血液細胞の IL-12 産生能を調べたところ、有意に IL-12 の産生能が低下していた。したがってザンビア国の研究者と HIV 感染者と ABPC に関する共同研究を行った。ザンビア国の許可および HIV 感染者の承諾（インフォームドコンセント）を得て ABPC および偽薬を HIV 感染者に投与したところ、1年後には ABPC 投与により CD4(+) T リンパ球数の低下が防げられた。

以上、これらを中心に報告したい。